はじめて災害看護を経験して　岩手県立宮古病院の活動記録

（上山純子ほか、ナース発　東日本大震災大震災レポート、東京、2011、72-78）

2015年10月16日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

2011 年の 3 月 11 日に東日本大震災は発生した。著者の病院は高台にあったので、津波の被害からは逃れることができ、震災直後から災害拠点病院として看護を開始した。津波で被害を受けた患者さんが次々と入院してきた。病棟は重症室のみ自家発電に切り替わり、津波の被害を受けた患者に電気毛布で保温したベッドを作った。しかし、入院しているのは被災された方だけではなく、災害前より入院している患者もいた。

そういうわけで、病院はいっぱいだった。さらに、一日 12～13 人もの患者が入院してきていて、数日後には避難所から二次災害の方が入院することが予想されていた。そのため災害対策本部に、症状の落ち着いた人は退院してもらうよう指示され、医師と患者の病状について話し合い、重症でない限り、入院した翌日か翌々日には退院してもらった。ほとんどの患者は津波の被害を受けており、自宅がなかった。また、携帯電話も不通だったので退院しようにも家族と連絡することができなかった。なので、家族がどこにいるかもわからない状態で自宅のあった地域の避難所を紹介し、保健所の用意した車で送った。災害で入院してきた患者は痛くて寒い、そして怖い体験をしていたはずだった。そういうような人たちに、十分に看護ができていない状態で退院をお願いすることは心苦しかった。しかし、患者は「一晩泊めてもらっただけでもありがたい」とか「もっと重症の人が来るんだもんね」などと言ってくれた。

看護師もまた被災者である。父親を一人残してきたり、搬送されてきた人が家族であったりというような職員もいた。そういった不安がありながらも「自分は医療職で、いま病院にいるんだ」という状況を受け止め、皆必死に活動した。そんな中、災害から二週間目に日本看護協会から災害支援ナースが来てくれた。そのおかげでスタッフの人数に余裕ができ、災害にあった職員や家族の安否がわからない職員に休暇を取らせることが可能となった。災害支援ナースの派遣を受けて全国に看護の仲間がいることを、身をもってありがたく感じることができた。